平和への思い ポスターに

秋田美大付高等学院10人

土崎空襲の語り部への聞き取りなどを基にポスターを制作した生徒ら

3日から展示 みなと伝承館

土崎空襲学び表現

サキガケ 2023・12・1

秋田公立美術大付属高等学院（秋田市新屋）の3年生10人が制作した、戦争の悲惨さや平和の尊さを伝えるポスターが今月、秋田市の土崎みなと歴史伝承館で展示される。終戦前夜に土崎地区を襲った空襲の体験者から話を聞いたり、戦時中の資料を実際に触ったり―。初めて戦争を身近に感じた生徒が思いを込めて仕上げた作品だ。

◇　◇

生徒たちがポスター作りを始めたのは今年春。「ピース（平和）」がテーマの県美術展覧会（県展）に出品するためだった。ロシアによるウクライナ侵略などが連日報道されていたが、「遠く離れた国の話はどこか人ごとで、距離感が難しい」と指導担当の澤田弦吾講師（43）は感じた。着想を得るための題材としたのが土崎空襲だった。

土崎空襲は1945年8月14日夜から翌15日未明にかけて米軍によって行われ、投下された爆弾は1万2千発を超えた。市民ら250人以上が犠牲になったとされる。澤田講師は「身近な『戦争』は平和の尊さを感じ取る近道になると考えた」と話す。

生徒は歴史伝承館を訪ね、空襲の基本的な情報や、標的となった旧日本石油秋田製油所内の被災建物から移設された遺構を見てリポートにまとめた。より具体的な被害や当時の生活を知るために、空襲の伝承活動を続ける市民団体「土崎港被爆市民会議」の伊藤紀久夫会長（83）と、妻で空襲を体験した津紀子さん（83）にインタビューもした。

それぞれが感じたことを手書きやパソコンを使ってB1判（103×72・8センチ）のデザインに落とし込む作業には約2カ月を費やした。澤田講師によると、初めて触れた戦争の実相に耐えられず、最初は戸惑う生徒もいたという。

加藤亜依未さんは制作を通して土崎空襲を知った。資料に触れ、「色」に興味を引かれたという。「洋服が好きだけれど、今のような鮮やかな色はなくて、みんなカーキ色で…衝撃を受けた」

津紀子さんから当時のもんぺを借りるなどし、ポスターでは当時の生活用品を図解することに。完成したポスターは県展で特賞を受けた。加藤さんは「ニュースを見るたび、ウクライナやガザの人たちも、当時の土崎の人たちのような思いをしているのかと考えてしまう」という。

生徒に見せた爆弾の破片や空襲をテーマにした絵本を手に伝承への思いを語る伊藤さん夫妻

生徒たちの活動は、市民会議にとってもうれしい出来事だ。「語り部が高齢化し、体験を伝えることはもうすぐできなくなるが、ポスターはこれから先もずっと残る」と津紀子さん。紀久夫さんも「私たちの思いをしっかりと受け取ってもらった。作品は多様性があり、それぞれに訴えるものがある」と目を細める。

伊藤さん夫妻は、旧日本軍が真珠湾攻撃をした12月8日に合わせて土崎空襲展を開くに当たり、ポスターも見てもらうことにした。期間中は10枚のポスターを展示するほか、生徒が参加してのギャラリートークも予定している。

鎌田ひかるさんは「戦争の話を遠ざけるのではなく、感じたことを素直に表現した。私たちが自分のこととして考えた平和とは何かについて、知ってもらいたい」と話す。

展示は3日から24日まで。土崎みなと歴史伝承館の開館時間は午前9時～午後5時（火曜休館）。入館無料。ギャラリートークは10日午後1時半から。終了後にはボランティアによる証言の朗読会もある。問い合わせは伊藤さん☎018・845・2688

（三浦正基）